

小噺・落語入門サロン

■ 前座 (今日の話題・話のネタ)



「ヒライ信」骨付き漢字と Bone Dance

落語歳時記シリーズ

夏の落語「千両みかん」

夏の暑い盛り、呉服屋の若旦那は病に苦しんでいた。明日にもどうにかなってしまう状況。医者が懸命に診察しても原因がわからない。

おそらく気の病だろうと医師は言う。主人は番頭に命令する。……

「ひょっとしたら好きな人でもできたか？ 仕事のことでなにか悩みか？」
あらゆる想像を張り巡らし、しつこく聞く番頭に若旦那が思いを吐露した。
ためらいがちにぼそっと発したその一言は「みかんが食べたい」だった！



「え、みかんが食べたい？」あまりの発言にあっけにとられた番頭は、なんだそんなことかともかんを用意することを安請け合いする。ところが季節はこの暑い夏の真っ盛り。みかんは冬が旬の食べ物。江戸中どこを探してもあるはずもない。焦って安請け合いした番頭は真夏にみかんを探し求めて、なんとか神田の大きな果物問屋にたどり着いた。

その果物問屋は冬場に採ったみかんを貯蔵していた。みかんを求めて山積みになった木箱をどんどん開ける。だが夏の暑さにやられて傷んだり腐ったりしているみかんばかり。ついに最後の一箱。その中から奇跡的に傷んでいないきれいなみかんが一個だけ見つかった。

助かった。果物問屋の主人が「そのみかんは千両で譲りますよ」「千両!？」

店に戻って旦那に報告する。旦那は「息子の命が千両で助かるなら安いこと」と二つ返事。千両で買ったみかんを若旦那のところにもっていく。その苦勞を知ってか知らずか、若旦那は美味しそうに十房ある内の七房をぺろりと食べた。そして残り三房を両親とお祖母さんに渡してくれと番頭に渡した。番頭はその三房をじっと見つめた。「十房で千両のみかん。三房は三百両。このみかんを売れば三百両手に入る！このまま奉公してても、三百両なんて金は手に入らない」番頭はみかん三房を持ってどこかへと逃げしてしまった。



■ 二つ目 (小咄の稽古)

映像や音声から学ぶ、小ばなしのコツ・つぼ

「プロに学ぶ小噺の話し方」「読書」

そのあと、皆さんの小ばなし披露とアドバイス

■ 大喜利

今回も **謎かけ** で、お題は「枝豆」「蚊取り線香」とかけて

次回は2023年9月4日(月)「蜂」「コスモス(秋桜)」